

セブ島旅行記

——伊原君の「ぼくの村」に行ってきた (08/10/15~24) ——

村田 正夫

出発まで

同窓ゴルフコンペの度毎に聞かされる、伊原君のダイビングの話と、彼の「ぼくの村」(注)の自慢話に刺激されつつも、半信半疑で聞いていた僕だが、いろいろ考えた末、思い切って彼に同行することにした。僕は、正直言って、ダイビングにはあまり興味は無かったが、会社を早期退職した彼が、会う度に熱く語る、「ぼくの村」での充実した生活は、来年、定年を控えた僕にとっても、大変魅力的なものに思えた。会社勤めから解放され、自由を手にすることが出来ても、毎日を無為に過ごし、中年ウツになってしまうということがよくあるという話を聞いたりして、そろそろ「自分探し」を始めよう、との思いもあった。ダイビングも、やってみて面白くなければ、やめればいい。自分が好きかどうかは、やってみなくてはわからない。とにかくアクションを起こしてみよう…。

4月5日のゴルフコンペ終了後のパーティーで、いつものとおり、彼の熱い話を聞かされたあとで、「僕も行きたいから、連れて行ってくれ」と頼んだところ、彼は、本当にうれしそうに快諾してくれた。その後、彼のアドバイスに従い、ダイビングのテキストを買ったり、飛行機のチケットの予約をしたり、ネットで「ぼくの村」を調べたりしているうちに、僕の心はセブ島に飛んでいた。出発の一月ほど前になって、植草君夫妻も参加する事となり、9月12日に伊原君からのガイダンスを受けるため、4人で船橋で会食をした。彼のきめ細かなレクチャーと、彼が持参した沢山の海中写真を見せてもらい、僕の気持ちはいやが上にも高まっていった。

(注)：伊原君は、あまり知られていない「ぼくの村」が俗化するのを恐れ、実際の地名を言いたがらない。僕が本当に行く意思があることを彼が確認するまで、「ぼくの村」の本当の地名を教えてくれなかったほどだ。彼の「ぼくの村」を大切に思う気持ちを尊重し、ここでは「ぼくの村」という表現にさせていただきます。

出発

いよいよ出発の10月15日の朝を迎えた。「東京ディズニーリゾート」のバス乗り場から成田行きのリムジンバスに乗った。ここも「リゾート」だけど、みんな作りものだ。僕がこれから向かうのは、フィリピンのど田舎の本物のリゾートだと思うと、ちょっぴり誇らしい気持ちになる。第2ターミナルで降りて、一番端にあるフィリピンエアのカウンターへ向かう。僕がカウンターに着いた時、丁度、植草夫妻が到着したところだった。ものすごい荷物の量だ。伊原君のアドバイスで、現地の人たちにプレゼントする古着を沢山持ってきたそうだ。三人分の荷物をまとめてチェックインしたので、辛うじて、ウエイトオー

バーにならずに済んだ。伊原君からメールが入り、少し遅れるとの事。バスが遅れているらしい。14時30分の出発まで、まだ2時間以上ある。3人でお茶をしながら伊原君を待った。程なく彼も合流し、さあ、いよいよ出発だ。これから10日間の冒険旅行が始まる。飛行機は定刻に離陸した。フィリピン航空は初めて乗るのだが、予想に反し、エアバス330の、でかい飛行機だった。以前ベトナム航空のローカル便に乗った時、大型バス程度の機体だったのを思い出し、ほっとした。座席が空いていたので、中央の4人掛けシートのひじ掛けを上げて横になった。これなら、ファーストクラス並みの快適さだ。間もなく機内サービスが始まった。僕は、ビールを一杯だけにしておいたが、伊原君はワインをガブガブ飲んでいる。あとで聞いたら8杯も飲んだとの事。酔った彼は、後部座席の方へ移動し、クルーのお姉さんたちと騒いでいたらしい。この機内での飲みすぎが、あとで彼を悲劇に導くことになる。

到着

18時30分、定刻にセブ空港に到着した。入国手続を済ませると、きれいなお姉さんたちが手招きをしている。両替所だ。5つのブースがあって、自分の所で両替をしてくれと客引きをしている。酔っ払いの伊原君はフラフラしながら冷やかしている。どこも同じレートなので迷ったが、一番きれいなお姉さんの店で5万円をペソに替えた。伊原君が手配してくれていた、「ぼくの村」のダイブショップのスタッフがワンボックスワゴンで迎えに来てくれた。運転手は伊原君の知り合いのようで、「お帰り」、「ただ今」と言い合っている。「ぼくの村」までは、およそ100km。2時間30分のドライブだ。空港があるマクタン島は、セブシテイにあり、日本の旅行客がセブに行くのは殆どこの島で、高級ホテルがたくさんある。伊原君によると、セブシテイは怖いところだから、いつも素通りだそうだ。マクタン島とセブ本島との間には、幅員50m以上もありそうな立派な橋が2本かかっている。現地の人はこの橋を「カジマ」と呼んでいる。日本のODAで作られた橋で、鹿島建設が施工したとの事。1時間ほど走ったところで、買い物のため、ショッピングセンターに立ち寄ったが、生憎、閉店時刻を少し過ぎたところだった。仕方なくその町のスーパーで、ミネラルウォーターを買い込んだ。2カ月滞在予定の伊原君は6リッター入りの、でかいボトルを8本、僕は3本、植草夫妻は6本、ものすごい量の水が車に詰め込まれた。ついでにクッキーや石鹸などを買ったが、信じられないほど安い。6リッター入りの水は1本130円だ。コカコーラが一本20円、ヤクルト（容器と味は、日本のと全く同じだが、ラベルに「フィリピンヤクルト」と書いてある）6本パックが80円、パン（デニッシュ）一個5円……。街灯も信号も無い国道を2時間ほど走ると、「ぼくの村」の中心街に着いた。そこから細い道に入り4キロ程走ると、目的地に到着だ。途中の荒涼とした風景に比べると、リゾートだけあって、土産物屋やレストラン、バーなどが沢山あって結構賑わっている。車はゲートを通過して、コテージの玄関まで入ってくれた。大量の水を買ったわけは、運搬の労力を減らす為だった。部屋は思ったよりも広く、きれいだった。ベッドが2つで、ベランダ

付き。冷蔵庫とエアコン、温水シャワーも付いている。ウオシュレットは無いが、外国では、見たことがないので仕方ない。調度はラタン製で、リゾートらしくカラフルだ。これで一泊 34 ドルなら安い。



コテージ外観



コテージの内部



ベランダ

伊原君は一泊 10 ドルの「バンガロー」。エアコンなし、冷蔵庫なし、シャワーは水。でも、ここの生活に慣れた彼には、これで十分だそうだ。荷物を部屋に運び、一休みしたところで、近くのレストラン（海の家のような掘立小屋）でビールを飲んだ。つまみは、豚肉のバーベキューだ。今日は疲れたから早く寝よう。

初日はシュノーケリングで犬になる

夜が明けて朝食をとり、コテージの隣にあるダイブショップに集まった。伊原君が困った顔をしていた。彼の携帯が見当たらないとの事。昨日、空港から「ぼくの村」への移動中のどこかで落としたらしい。酔っぱらっていてあまり記憶がない、との事だった。皆で探したが出てこない。これから 2 か月滞在する彼にとっては大変だ。更に、植草君たちは携帯を充電しようとして、充電器のコンセントを入れたら、画面が真っ黒になってしまったそうだ。僕の携帯は海外では使えない。結局、我々は、完全に通信途絶状態となった。まあ、日本の事はすべて忘れて、ゆっくり楽しめとの神の啓示だと思い、あきらめることにした。

目の前には透明な海と、吸い込まれそうな青空が広がっている。いよいよ今日からダイビングが始まる・・・と思っていたが、今日は、我々の先生のディノが、他の生徒のレッスンがあるので、一日シュノーケリングをやるよう言われた。フィン（足ひれ）とマスクをつけ、シュノーケルをくわえて海に入った。今日の先生は、アキオ DM（ダイブマスター）だ。僕も植草夫妻も、ダイビング初心者だから、いきなり重い装備を付けて海に入るより、その方がいい。

胸くらいの深さの海で、海中の魚を見ながらシュノーケリングだ。浅いところなので、あまりきれいな魚は見えない。海面の遊泳に慣れてきたころ、アキオが手に 20 センチ位の大きなヒトデを 2 つ拾ってきた。それを 10 メートル位の所へ投げて、僕らが拾ってくる訓練だ。顔を上げずに、離れた 2 個を拾うので、顔を海中につけたままシュノーケルに入った海水を吹き出さなければいけない。うまく吹き出せないで、海水を飲んでしまったりし

て結構難しい。植草君が上って来た時に、何と彼の手には3個のヒトデがあった。2個拾うのも大変なのに3個になってしまった。回数を重ねるうちに何とか3個拾えるようになった。慣れてくると結構楽しい。家の近所の公園で、犬にボールを投げて取って来させる遊びを思い出した。犬になった気持で、アキオご主人様の投げるヒトデを取ってきて、ご主人様に渡すのだ。上手にできた時は、ほめてくれる。犬の気持ちが少しわかった気がした。何とかシュノーケリングが出来るようになって初日が終わった。夕日が美しい。



シュノーケリングをした澄んだ海



きれいな夕景

いよいよダイビング

今日からダイビングのレッスンが始まる。ここでは皆、ファーストネームで呼び合う。今日から、僕は「マササン」、植草君は「タカサン」奥さんは「セッティー」だ。伊原君は到着した時から、「アキオ」と呼ばれている。

先生は、アキオがDM(ダイブマスター)の資格を取った時の恩師のディノ(38歳)だ。彼はセブシティでのホテル勤務の経験があり、ほんの少し日本語がわかる。大変ユーモアがあり、ナイスガイだ。彼は、我々にOWD(オープンウォーターダイバー)のライセンスを発行する先生で、自分がサインをするライセンスの所持者は、それにふさわしいスキルをもっていないてはならないという、強い信念とプライドを持っている。当然、レッスンは大変厳しく、出来ない事があれば、出来るまで徹底的にやらされる。外国では、「金さえ払えば、適当にライセンスをくれる」、などといった話を耳にしたことがあるが、彼には全くあてはまらない。

ダイビングは、決まり事をきちんと守れば、安全なスポーツだそうだが、水深30メートル以上も潜るのだから、いい加減にやると命にかかわる。水中での浮力の調整と、呼吸をするために様々な装備を付けるが、それらの各種装備の仕組みや、作動確認などは、全て自分でやらなくてはならない。また、万に備え、必ず2人で組んで潜ることになっており、その相手を「バディ」という。ダイビング中にバディに何かあった場合、助けるための技術も必須だ。水中で自分のレギュレーター(空気が出てくる吸い口)を相手に使わせたり、トラブルが起きた時の対話のサイン、足がつった時の救助法などを徹底的に練習させられる。また、自分のための必須スキルとして、耳抜き(水中で深度が増すと水圧で耳がツーンと痛くなる)、中性浮力の維持(沈みも浮きもしない状態の維持)、マスククリ

ア（マスクに入った海水を水中でクリアする）などがあるが、これらは結構難しい。その他にもテキストで学習しなくてはならないこともたくさんある。使用する、様々な機器の名称や、機能、浮力、水圧、血液中の残留窒素への対処、等々盛り沢山だ。計算問題もある。実地以外の勉強は現地に入る前に終わらせておかないと大変だ。最後に 50 問もの、テストがあって、これに受からないと、ライセンスはくれない。僕はアキオのアドバイスに従い、予習はちゃんとやっておいたので助かった。しかし、僕が困ったのは、恐怖心だった。自分の背丈よりもはるかに深い海中で、口にくわえた管からしか息が吸えない。マスクをしているので、視野が極端に狭くて周りが見えない。マスクの中に少しずつ海水が浸入してきて、鼻に入る。深度が増すにつれて、暗くなる。ウェットスーツで体がきつい。水中なので会話が出来ない……。これらの条件が重なる事により、恐怖心（閉所恐怖症？）が生じてきてしまう。そうすると、呼吸が浅く、早くなってしまい、脳に十分な酸素が届かなくなり、パニックに襲われる。とても、綺麗なサンゴやかわいい熱帯魚を楽しむなんて余裕はない。以前、鴨山君が MRI 検査の途中で検査着のまま逃げ出してしまったと言っていたことを思い出した。二日間で、技術的なものはなんとかマスターしたが、この恐怖心からはなかなか逃れられなかった。3 日目の夜には、「もうライセンスなんかいらぬから、明日は一人で日本に帰ろう」と思ったほどだ。

翌朝ディノ先生にこの話をしたら、彼は、「最初は、皆そうだから心配いらない、大事なものは、大きくゆっくりと呼吸をして、リラックスする事だ」と教えてくれた。先生のアドバイスに従い、意識してゆっくり大きく息を吸い、海中での動きも、スローモーション映像の様に、ゆっくりとするようにした。すると不思議な事に、周りがよく見えるようになり、マスクへの海水の侵入もあまり気にならなくなった。どうやら、パニックを脱する事が出来たようだった。大きなアオウミガメが悠々と目の前を通り過ぎるのに出会えた。やっとリラックスして、海中散歩を楽しむことが出来るようになったころ、規定の 4 本のダイビングが終了した。あとは学科のテストだけだ。

テストを終えて、楽しいファンダイビング

翌日の午前中は、いよいよテストだ。50 問の問題が出て、75%で合格との事。難しい問題は適当に答えて 30 分位で提出。結果は正解 41 問で、ギリギリパスした。これで僕もオープンウォーターダイバーだ。今夜は、アキオが我々のために、お祝いのパーティーを企画してくれている。場所はディノ先生の自宅だ。一緒にダイビングをした他のダイバーや、ショップのスタッフなど、全部で 30 人位が来るそうだ。費用は我々 3 人の生徒が出した（一人 6 千円の負担）。料理も得意なディノ先生は、その準備のため、午後は自宅に帰ったので、午後は、アキオ DM と一緒にファンダイビングだ。水中でのマスククリアや、バディとレギュレーターを共有する等の、苦しい練習も無く、ただ、楽しく水中遊泳するだけの、「ファン」ダイビングだ。ボートで 15 分ほどの距離にある、無人島でのダイビングだ。周囲 500 メートル程の小さな無人島の周りを水中遊泳する。島から 50 メートル位は水深 5 メー

トル程の深さで、その先は、何十メートルあるのか分からないほど深い絶壁になっている。セブで最も美しいといわれているこの島の周辺は、まさに水中のお花畑だ。色とりどりのサンゴの中を、沢山のきれいな魚が泳ぎまわっている。小さな魚が群れをなして、すぐそばを通り過ぎたり、1メートル位もある大きな魚が、悠々と泳いでいたりする。珍しい魚がいると、アキオ先生が手に持った指棒で示してくれる。穴の中に隠れたウツボを追い出して見せてくれたりもした。水深 30 メートル位潜ると、体長 20 メートル近くもある、ジンベイザメに会えることもあるという。ジンベイザメは、こちらでは「ホエールシャーク」と呼ばれている巨大なサメだ。このサメはプランクトンしか食べないので、危険はない。我々は初心者なので、20 メートル位の深度で遊泳しているが、はるか下の方から、他のベテランダイバー達の出す気泡が上がってくる。この日、同行したベテランダイバーはジンベイザメに会う事が出来たそうだ。いつの日か、僕も見たい。あっという間に、50 分間の夢のようなダイビングが終わった。



「水中のお花畑」の無人島



ボートでダイビングポイントへ

お祝いのパーティー

夕方、歩いて 5 分程のディノ邸に向かった。このあたりでは、一番立派なお屋敷だ。彼はこの家に、お母さん（リンリン）と、奥さん（シルビア）、3 人の男の子の 6 人で住んでいる。そして、この家には 3 人の中学生くらいの女の子がメイドとして一緒に暮らしている。彼女たちは貧しい家の子たちで、この家から学校に通っているとの事。みんなかわいらしくて、よく働いていた。



ディノ先生のファミリーと



料理も得意なディノ先生

我々が着いた時には、既に大勢の人たちが集まっていた。皆の寄せ書きが書かれた T シャツをプレゼントされた。感激しながら、その T シャツに着替えた。僕は、パーティーだったので、一番お気に入りの黄色いシャツを着て行ったが、着替えた時に、そのシャツをディノ先生にとられてしまった。黄色いシャツは彼にとってもよく似合っていたので、プレゼントした。料理のメインは、大きな豚の丸焼きだ。他にもディノ先生が用意してくれた、沢山の料理や、果物が並んでいた。皆が、祝福の握手をしてくれた。何という幸福感。この人たちはみんな良い人たちだ。こんがり焼けた丸焼の豚の皮はパリパリで、とてもおいしかった。



僕のシャツを着たディノ



おいしかった豚の丸焼き



二人のDMと

「ぼくの村」での生活

「ぼくの村」には、世界中からダイバーが集まっている。ドイツ人やイタリア人が経営する施設が多いので、客もヨーロッパ人が多いが、韓国人や日本人も結構いる。韓国人は韓国人だけのダイブショップを利用し、団体で行動し、大騒ぎしているので、近寄れない。まあ、僕も団体で外国へ行ったりした時は、他の人たちから同じような目で見られていた

のだろう。我々が利用したダイブショップには、ヨーロッパ各国からのダイバーが多かった。西洋人は、割と気さくで、ユーモアがあるので話しやすい。滞在中に、ダイブショップで、フランス人の女性と、日本人の女性と知り合いになった。二人とも一人旅だ。そして二人とも、アキオと同じ、DM（ダイブマスター）だそう。パリに住むフランス人女性（太めの48才、陽気なインテリ、ショートカットの銀髪がかっこいい）は、毎年、2ヶ月間かけて、世界各地のダイビングスポットを訪ね歩いているとの事。残りの10ヶ月は、休みなしで仕事だそう。彼女との会話は、英語が主だが、アキオは流暢にフランス語も話す。アキオのフランス語は、かなりのものだ。僕も多少話すが、単語が出てこなくて、すぐに英語交じりになってしまう。日本人の女性（30才くらい？、大阪堺市在住）は小柄できゃしゃな体つきなので、DMの厳しい試験をパスしたのが信じられない。二人ともダイビングのために生きているような人達で、明るく、元気はつらつとしていた。同じボートでダイビングスポットに行ったが、彼女たちは、我々よりはるかに深い海中で、夢中で魚の写真を撮っていた。皆、ファーストネームで呼び合うので、親しみが増す。彼女たちとは、2度夕食を共にし、我々のパーティーにも招待した。



最後の晩餐

「ぼくの村」のレストランは大きく分けて、2種類ある。地元の人や長期滞在のダイバーがよく利用するのが、「カロンデリア」というスタイルのレストランだ。店頭に5~6個の鍋が並んでいて、ふたを開けて中身を見て、好きなものを注文する。各種の煮魚や、豚肉、野菜スープなどの料理が入っている。夕食で、2~3百円程度で済む。味は悪くないが、薄暗い店頭に置かれた鍋の中は、見た目が悪く、残り物のような状態になっていて、何となく気持ち悪い。もうひとつは、普通にメニューを見て、注文するレストラン。「カロンデリア」よりも少し高いが、4~5百円くらいのものだ。どちらのスタイルのレストランも店頭には、とれたての魚が並べられていて、好きなものを注文することもできる。アキオは当然、「カロンデリア」派だが、僕はあまり好きになれなかった。主食は米だが、ボロボロ・パサパサで、日本のご飯と比べると、ひどくまずい。タカサン夫妻が持参した、「のりたま」

をかけて食べたら、何とか食べられた。アキオは、この米を、うまいと言って食べていた。この米がうまいと思えるようになれば、本物だけど……。他にも、イタリアンレストランも2〜3軒あり、ピザやスパゲッティはおいしかったが、アキオは外人専用の店だからと言って、嫌っていたようだった。また、提灯をぶら下げた「日本料理屋」もあったが、アキオの「あそこはまずい」の一言で一度も入らなかった。

マーケットへ買い物

帰国を翌日に控えた10月23日は、午前中に無人島で最後のダイビングを行い、午後には、「ぼくの村」から、4キロ離れた町のマーケットに、お土産を買いにいった。町役場もあるこの町の中心には、露天のような店が2〜3百軒くらい集まったマーケットがあり、地元の買い物客で賑わっている。ここへの移動は「トライシクル」という三輪車に乗って、15分位だ。「トライシクル」は、オンボロバイクの横に、屋根付きのリヤカーをつけたタクシーで、大人4人乗るとぎゅうぎゅうだ。狭いがたがた道を飛ばすので、対向車とすれ違う時などは、スリル満点だ。料金は4人で、150円くらいだが、必ず交渉が必要だ。



移動手段は「トライシクル」

アキオは、乗るたびに、地元の物価抑制のためと言って、必死になって10円・20円の値切り交渉をやってくれた。我々は、このマーケットで、お目当てのマンゴーを大量に買い込んだ。僕は4Kg（15個）買った。値段は650円くらいだった。アキオとタカサン夫妻は、刃渡り50cmもあろうかという、蛮刀（現地では、「ボロボロ」という。何だかすぐにぼろぼろになりそうなイメージだ。）を買っていた。立派な木製の鞘付きで500円位とのことだ。農業をやっている彼らは、僕とは違うものに関心がある。「トライシクル」の運転手さんや、物売りのおばさん達、レストランの人たち、そして通行人も含め、ここの人達は、貧しいながらも懸命に生きている。そして、幸せそうな表情をしている。道ですれ違うと、ほとんどの人は、ニコリ笑って、「ハロー」と言ってくれる。子供にカメラを向けると、大抵、ポーズをとって微笑んでくれる。東京でこんな事したら、きっと「変なおじさん」扱いされるに決まっている。



ポーズをとってくれる少女



チビちゃんたちもかわいい

帰国

二人のベテランダイバーたちを交えた最後の晚餐を終え、いよいよ明日は帰国だ。9日間は、あっという間に過ぎ去ってしまった。朝7時40分の便だから、午前3時には出発しなくてはならない。荷造りを終え、最後に「ぼくの村」との名残を惜しむため、一人で散歩しようとして外に出た。ゲートの所で、門衛のトニーが、「明日帰るんだね。今度はいつ来るの?」と聞いてきた。「また、すぐに戻ってきます」と答えた。トニーは夜の8時から、朝の8時まで、ずーっと門の脇のベンチで過ごすそうだ。人懐こくて優しいような、いい人だ。様々な思いを胸に、暗くなった「ぼくの村」を15分ほど歩きまわって、部屋に戻った。2時には起きなくてはならないのに、なかなか寝付けなかった。

今日は帰国の日、10月24日だ。夜中の2時に目覚まし鳴った時、外は激しいスコールだった。3時になって、小やみになっている雨の中を、荷物を押しながら外に出たが、まだ迎えの車は来ていない。植草夫妻もまだ来ていない。ダイブショップの庇の下で待っていると、一人の若いフィリピン人の美女が近付いてきた。セブシティまで、同乗させてほしいと言ってきた。僕らは3人で乗るので空席はない旨伝えたと、残念そうに立ち去った。こんな時刻まで、何をしていたんだろう?しばらくすると、植草夫妻がやってきたが、車はまだ来ない。不安を感じながら待つこと約30分、やっと暗闇の中に迎えのワゴン車が到着した。雨はもう止んでいた。荷物を積み終え、遂に「ぼくの村」に別れを告げる時が来た。帰りも、来る時同様、暗闇の中を車は疾走する。まだ夜明け前なので、車は全く見かけないが、国道沿いを歩いている人たちがいた。こんな時間に何をしているのか不思議だった。時々、痩せこけた犬が悠々と道を横切って、ドライバーのエドモンは急ブレーキを踏む。来るときよりも早く、2時間ほどで空港に着いた。エドモンに最後の別れを告げ、車を見送った。 出国手続きで、ちょっとしたトラブルがあったが、定刻の7時40分に無事離陸し、僕の初めてのダイビング旅行は終わった。

終りに

「ぼくの村」は想像していたよりも良い所だったし、何よりも、アキオの現地での人気者ぶりと、彼の、我々に対する面倒見の良さが印象に残った。自分のダイビングへの、やる気持ちを抑えて、我々の滞在中、ずっとディノ先生の助手として、レッスンに付き合

ってくれた。千葉高同窓生はありがたい。

「ぼくの村」の人々は、貧しいながらも幸せなように生活していて、皆、明るく親切で、穏やかな人たちだった。腰痛を抱えて、恐る恐る挑んだダイビングだったが、アキオがその事をみんなに伝えてくれたおかげで、重い機材の運搬など、全てスタッフの人たちがやってくれた。水中では、腰への負担は全く感じられず、快適に過ごす事が出来た。

この旅行でいろいろな事を学んだが、一番大きな収穫は、ダイビングのレッスンの中に、ディノ先生が言った、「ゆっくり、大きく呼吸をし、リラックスする」という言葉だったような気がする。この事は、ダイビングだけでなく、これからの生き方にも通じると思う。

「やって見て面白くなければ、やめればいい」と思って始めたダイビングだったが、今ではすっかり虜になってしまったようだ。今度行く時は、絶対に水中カメラを持って行って、きれいな魚や、サンゴの写真を沢山撮りたい。アキオは12月12日に帰ると言っていたが、今日も、あの澄みきった海の中を遊泳していることだろう。それに、11月25日には、高尾君が合流する事になっているし、他にも2~3人の参加希望者がいるらしい。そのうち、一年中、何時行っても、千葉高の誰かが「ぼくらの村」にいるような事になっているかも・・・。

(了 08/11/7)